

## 真宗院

〔安樂行院のひがしにあり、浄土宗にして西山派深草流義の本寺なり。仏殿の本尊は阿弥陀仏の坐像にして、

長四尺ばかり、春日作なり。脇壇の左に地蔵、毘沙門、右に善導、法然、西山の影を安置す。仏殿の額龍護殿と書して二重屋根に間にかくる、又祈祷の額は正面唐戸の上にかくる、又真宗院の竪額は堂内外陣の中央にかくる、後深草院の宸筆なり〕

通西軒 〔仏殿のひがしにあり、此地尼女人界内を許さずして、藩屏を隔、前に大界外相の立石あり、是当寺の別院とす〕

経蔵 〔仏殿の前西向にあり。本尊釈迦仏、坐像一尺余にして、宝冠の相なり。脇土は左に迦葉、右に阿難を安置す〕

## 鎮守社

〔仏殿のひがしにあり、春日、稲荷、愛宕を祭る〕

当寺は後嵯峨帝の本願にして、開山は円空上人なり。宝治年中の草創にて、初の地はこれより二町ばかり坤の方、今民家の間に藪あるの所といふ。〔其所に長五尺ばかりの五輪石塔あり、円空上人の塔といふ。当院中興は誓願寺の龍空上人にして、今の如く再建ありしなり〕

## 霞谷

〔北は宝塔寺の地より真宗院に及び、南は谷口までの惣名なりとぞ〕

深草の御門の御国忌の日よめる

古 今 草深き霞の谷にかけかくし照日のくれしけふにやはあらぬ

文屋 康 秀

玉 吟 おもひやる苔の下こそ悲しけれ霞の谷の春の夕暮

家 隆

夫 木 草深き霞の谷にはぐゝもる鶯のみやむかしこふらし

鎌倉右大臣

戸を閉て寝るや霞の谷の蝶

### 伏見院陵

〔帝陵記曰、深草山に火葬し奉り、御骨を同所後深草帝の陵、法華堂に蔵む。今安楽行院並に境内にも

申伝へなし、火葬所法華堂もしれずと。云々〕

### 後伏見院陵

〔同記曰、嵯峨野に火葬し奉り、御骨を深草山法華堂に蔵む、今此所にも申伝へなし定ならずと。

云々〕

### 履鼻

〔安楽行院の西、僧房村申西の方半町許にあり。真言血脉抄曰、聖宝尊師深草野に沓を脱し升天し給ふ。

聖宝伝曰、延喜九年四月深草普明寺におゐて病に臥ぬ、其時太上皇行幸し給ふ、同年七月六日聖宝尊師入寂す〕

貞観寺旧地ちやうくわんじのきうち〔今の瓦町かはらの地なり。一説墨染寺ちやうくわんの地貞観寺なりとぞ。三代実録じつろく曰、貞観四年嘉祥寺かしょうじの西院を以て貞観寺と号す。云々〕

善福寺ぜんふくじ〔同郷瓦町かはらにあり。真宗にして東本願寺に属す。開基東山勝久寺しょうきゆうじの祖願知そぐわんちの孫祐願いうぐわんの長男延正えんしやうの關せきく所なり。

此地もいにしへは嘉祥寺かしょうじの封境にして、本堂の礎上古の伽藍石なり。又仁明帝にんみやうていより嘉祥寺開祖真雅僧都しんがそうづへ御附属ありし薬師やくし仏ぶつ当寺たうじにあり〕

猿丸太夫墳さるまるだいのつか〔瓦町かはらまちの西田間さいだまにあり。此人生死さだかならず。一説、深草土器師ふかくさかほらけしといふ、和歌に妙を得て希代独歩の歌仙なり〕

鎮守松ちんじゆのまつ〔同郷高山たかやまの内南の方にあり。いにしへ嘉祥寺の鎮守の神木なり。又此東に戒壇にいふ字の所あり、授戒堂じゆかいだうありし旧地なりとぞ〕

女御貞子墓によこていし

〔今詳ならず。女御は仁明帝の皇妃なり。三代実録曰、貞観六年六月三日仁明天皇の女御正二位藤原朝臣貞子薨ず、勅して従一位を贈る、深草山陵の兆域の内に葬ると。云々〕

谷口たにぐち

〔深草郷ふかくさこうひがし南にあり、此所伏見ふしみより大津おほつに至る街道なり。是より山路に至る喉口たにぐちなれば谷口といふ〕